

第 59 回 気質と性格について

平成 21 年以来仙台青葉学院短期大学で1年生の学生に対して「生命科学と倫理」について講義しているが、この科目はとくに看護学科においては必修科目となっている。

現代医学の底流に存在する倫理精神は、キリスト教が国教となったローマ時代 (BC753-AD476) において、古代ギリシャの医術を集大成し、医学の祖ともいわれるヒポクラテス (BC460 頃-BC370 頃) に最大級の影響を受けてその基本が形成された。医学倫理の初期のさらなる貢献者のひとは、ヒポクラテスのギリシャ以来の医学を集成し、ルネサンスにまで伝える役割をしたと評価されている中世医学の権威と仰がれたギリシャの医師ガレノス (129-199 年) である。ガレノスの思想には「人間は単一の創造主 (Nature) によって創られた目的を持った創造物であり、肉体と霊魂が分離している」ということがいわれており、そのことが後世のキリスト教やイスラム教の学者たちに受け入れられたとされる。ガレノスはサルやブタなどの動物を用いて解剖学を進め、ヒトに応用すべく実験生理学の創始者としても知られている。生理実験の結果のひとつに喉頭の神経を切断することで声が出なくなることを実証し、その神経はガレノスの神経ともいわれ、現在の反回神経を含んでいる。

本稿の話題である「気質と性格」の気質について、最初に思い起こされるのがガレノスであるが、かれはヒポクラテスの医学における四体液説を引き継いで、気質について人間の体液が影響を与えるとしてそれを多血質、粘液質、胆汁質、憂鬱質の4型に分類した。近年ではエルンスト・クレッチマー (1888 年—1964 年) の気質の体型による気質類型論がある。クレッチマーは、細長型では分裂型気質、肥満型では循環型気質、闘士型では粘着型気質など、気質には3類型がみられるとし、上記それぞれの体型・気質の組み合わせの人間には精神疾患として、統合失調症 (精神分裂病)、躁うつ病、てんかん、などが関連しているというものである。しかしながら現在まで体型や気質が精神疾患の発症と優位に相関しているという科学的証拠はなく、これらは全く直観的な観察によるものである。クレッチマーによる気質分類もガレノスの影響を受けていると思われる。ガレノスによる気質の4類型によると、多血質は楽天的・活動的で、気が移りやすく、粘液質は冷静で不活発であるが、粘り強く、胆汁質は情動的反応が速くて強く、憂鬱質は些細なことでも誇大に考えて取り越し苦労をし、人を信用せず生気に乏しく暗い性質である、などとしている。これらのなかには筆者自身についても頷ける気質があるような気がするのである。クレッチマーの気質分類では、分裂型は非社交的、気づかないところと気づくところ両方が出る気質、循環型は社交的な時と静かな時が交互に出る気質、粘着型は几帳面で凝り性な気質、などがみられる。

気質は、ヒトを含む動物において先天的傾向が強く、刺激などに対する感情面での行動特性として、性格とは意味が異なっている。先天的傾向が強いとされる気質には原始的感情が基盤にあり、多分に遺伝性因子が関与している。

気質と性格について考えてみると、感情面での個性は気質という先天的な表現結果であり、気質が基盤となって作り出される行動や意欲の傾向が性格ということである。気質がどちらかといえば生まれつきな現象であることに対して、性格は後天的なものであり、ヒトが生後種々な条件のもとに変えていくことができるものである。

気質は先天的傾向が強いということは、それぞれの個体を構成する細胞の染色体 DNA 組み合わせの総体であるゲノムと関係があるといえるが、生後の気質に影響する無数の質的・量的な後天的刺激とそれらに対する反応の結果として性格が形成されるのではないかと考えるがどうであろうか。気質に上乘せ修飾された「性格」は個々の人間でみると決して同じにはなりえないのである。一卵性双生児やクローン人間であっても気質が後天的に修飾された結果である性格は完全に同じではない。両者はそれぞれ発育の過程で全く同じような外来刺激、言い換えれば全く同一の環境下におかれるわけではなく、したがって異なった個々の環境因子に対する反応の現れ方は無限といってもよいほどの結果となるのである。古来よりヒトは性格を含めて十人十色、三者三様、百人百色などと表現されているのは双生児にあっても同様なことなのである。さらに多くの血縁関係の中で生き写し、瓜二つ、などといわれても両者の性格が全く異なっている例はよく経験される。

1996 年、遺伝子が性格を決定づけるという研究成果が発表され、DRD4 という遺伝子が神経伝達物質のドパミン(ノルアドレナリン・アドレナリンの前駆物質)の受容体に関するものだとことが判明し、「新しいものが好き」というような性格に関係すると証明されたという。「心配性」「甘えん坊」まで遺伝子の影響があることが明らかになったという話や、遺伝子によって決まるパーソナリティは約3分の1程度であるという研究結果もある。しかしながらこれらの研究における研究対象となった母集団や研究方法の詳細は不明で、残念ながら筆者にとってはその研究結果が理解できないのである。

親から子へ生態的な特徴を伝える遺伝子が顔立ちや持病などのほかに体型や言動、さらに運動神経や能力などにもかかわるのは理解できるが、ヒトの性格に対する遺伝子の影響に関しては今後の巨大規模の広く倫理的配慮を基盤にした系統的研究によらざるをえない。しかしながらヒトの遺伝・体質・気質・性格・人格などと精神現象との関係に関する実証的研究は現在可能とは思えないのである。

最後に、ヒトの性格が後天的要素によることが大きいことは、個人それぞれの環境や教育のあり方によって将来進歩や変化の可能性があるということを書き留めておきたい。